

だいかたげべに 台方下平Ⅱ遺跡

—古代のニュータウン現る—

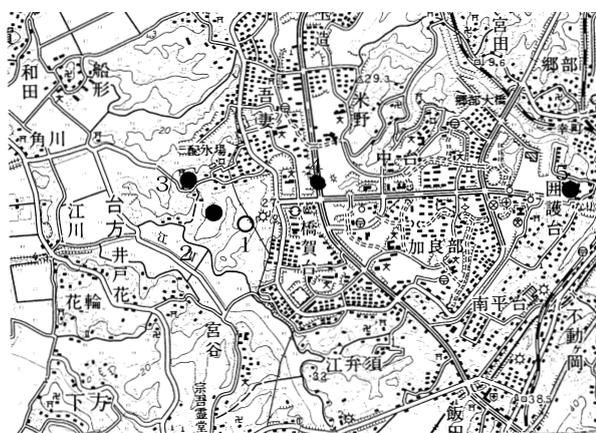
主任調査研究員 松田 富美子
嘱託職員 仲村 元宏

遺跡の立地と周辺遺跡

台方下平Ⅱ遺跡は、成田市台方字下平1129他に所在し、印旛沼に注ぐ江川の下流域、標高35m程の台地上に位置している。

谷を挟んで西側には、現在調査中の台方下平Ⅰ遺跡があり、周辺の台地には公津原遺跡群、公津東遺跡群、囲護台遺跡など、古墳時代から奈良・平安時代の集落遺跡が多く分布している。

また、本遺跡の北側には、5世紀から7世紀頃の古墳が116基見つかった公津原古墳群がある。伝伊都許利命墓として知られる天王・船塚27号墳は本遺跡から西に500m程の所に所在している。



遺跡位置図

1. 台方下平Ⅱ遺跡
2. 台方下平Ⅰ遺跡
3. 天王・船塚27号墳
4. 公津原古墳群
5. 囲護台遺跡

調査の目的と成果

調査は土地区画整理事業に伴うものとして、平成14年2月から平成15年の5月まで行われた。調査面積は49,303㎡である。

その結果、住居跡457軒（縄文時代中期1軒、弥生時代12軒、古墳時代後期239軒、奈良・平安時代205軒）、掘立柱建物跡154棟（古墳後期～奈良・平

安時代）、土坑88基（縄文時代24基、弥生時代2基、古墳時代3基、奈良・平安時代59基）等の遺構が検出された。

このように広範な時代にわたって多くの遺構を検出している遺跡であるが、以下の項ではその中でも中心となる古墳時代後期～奈良・平安時代について述べていきたい。

古墳時代

該期の住居跡は、5世紀後半頃、台地の南側から作られ始め、6世紀以降台地全体に広がっていく。古墳時代後期の住居跡は、ほぼ方形を呈しており、1辺が6～8m程の大きさをしている。壁際にカマドを作り、4本の支柱穴を持つのが一般的である。

この時代の注目すべき遺物としては、99号住居跡（7世紀後半）から出土した須恵器の高盤が挙げられる。胎土や焼き具合などから東海地方で作られたと考えられ、高盤の中でも類例のない形をしている。

奈良・平安時代

8世紀に入ると、住居の規模は小さくなる傾向にある。カマドはあるが、支柱穴を持たないものも現れる。さらに9世紀に入るとさらに縮小化し、1辺が3mに満たない住居跡も検出されている。

また、住居だけではなく掘立柱建物が台地の北側から中央部分にかけて集中して作られるようになる。

中でも台地の北側には、2間×2間（1辺3.6m～4m）の掘立柱建物跡がL字状に並ぶ場所があり、建物の中央にも柱がある総柱であるという点から、倉庫であった可能性が高く、建物が並ぶ向きを変えながら何度か建て替えを行っていた形跡がある。

さらに、同じく台地の北側にある100号掘立柱建物跡（8世紀）は、梁行7.58m、桁行16.74m（3間×7間）もある大型のもので、一際目を引く存在である。

土坑の中では調査区の中央付近にある35号土坑が注目される。祭祀或いは氷室^{ひむろ}などに用いたと論じられている直径5m、深さ3.5mを測る大型土坑で、出土遺物から8世紀前半のものと考えられる。同様の形態を持つ土坑は、近隣では本遺跡の西方約2.5kmにある成田市北囲護台遺跡で見ついている。

この時代の特筆すべき遺物としては、多くの墨書土器がある。とりわけ注目されるのは、75号住居跡（8世紀後半）から出土した「八代」と書かれた土師器杯である。現在、八代という地名は、本遺跡の2kmほど北側にその名を残している。平安時代に編さんされた『和名類聚抄』^{わみょうるいじゅうしょう}には印旛郡内の地名として記載されており、当時の八代がどこにあったのかを知る手がかりとなるものである。

また、畿内周辺で作られたと思われる土師器も見ついている。内面にはヘラ状の工具によってつけられた「暗文」^{あんもん}が見られる。

鉄製品では、鋤先や鎌など当時の人々の生業に関わる物や、鎌・刀子などが出土している。また、鉄を加工した時に出る鉄滓^{てつさい}を多く出土している住居跡もあり、集落内で小規模な鍛冶が行われていた可能性がある。

また、137号住居跡（8世紀初頭）から、「巡方」^{じゆんぽう}と呼ばれる帯に取付けた金具が出土した。大きさは縦2.3cm、横3.4cm、重さ4.8gで、銅に金メッキを施し、表面に弧状の連続した文様が毛彫りと呼ばれる細い線で刻まれている。152号住居跡（7世紀末～8世紀初頭）からは帯の尾端につけた「蛇尾」^{だび}と呼ばれる銅製の金具が、そして206号住居跡（8世紀）からは今でいうベルトのバックルにあたる「鉸具」^{かこ}が出土している。当時の役人の服装は『養老衣服令』^{ようろうえふくりょう}によると位階ごとに細かく規定されており、金銅製の腰帯は地方の長官以上の貴族が着けていたという。そのような遺物がどのような経緯で本遺跡にやってきたのか、また、本来は帯金具としてまとまっているべ

き物が、なぜ1点ずつバラバラな状態で出土するのか、興味深い問題である。

おわりに

5世紀後半に台地の南側から作られ始め、6～7世紀にかけて台地全体に展開した集落は、掘立柱建物群を形成する8世紀を経て、9世紀前半頃を最後に消滅する。その後、台地の中央部を中心に土坑墓群が形成されるが、古墳時代から続いてきた集落は終焉を迎えるのである。

このように、台地全体に及ぶ広大な面積の調査を行ったことによって、5世紀後半から9世紀前半にかけての集落の様相や住居の変遷等がわかってきた。

推察ではあるが、L字状に整然と並ぶ掘立柱建物跡や毛彫りが施された良質の帯金具の出土などから本遺跡には今で言う役所に関連する施設が存在し、機能していた可能性もある。今後は現在調査中の台下方平Ⅰ遺跡の成果や、周辺にある公津原古墳群との関係も合わせ、追究していきたい。



台方下平 遺跡遺構配置図 S=1/2500

0 31 100m

73号住居跡(「ハ」代)と墨書された土器出土

99号住居跡(須磨器青銅器出土)

100号竪立柱建物跡

152号住居跡(銅器出土)

206号住居跡(鉄具出土)

234号住居跡

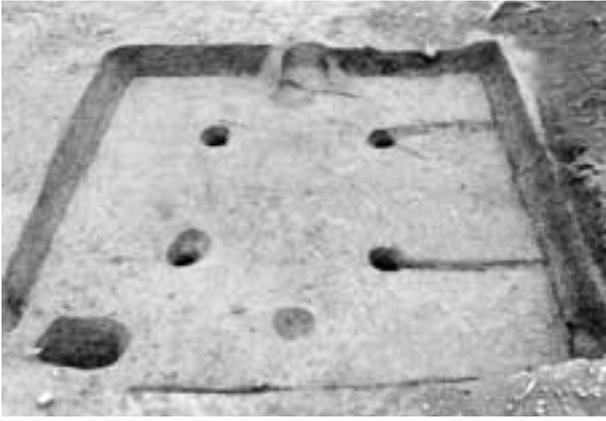
総柱の竪立柱建物跡群

137号住居跡(巡方出土)

東京電力
西成田変電所

35号土坑

武蔵



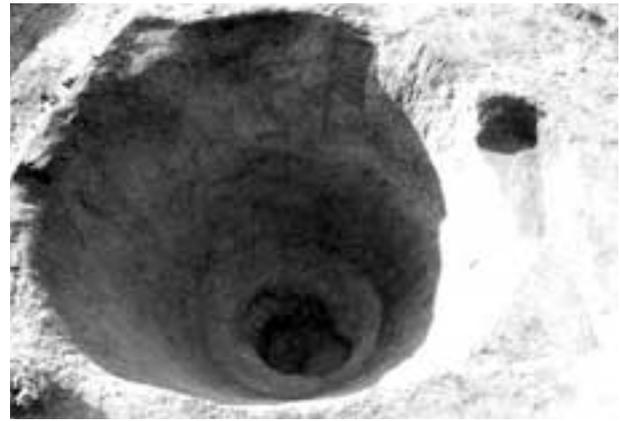
古墳時代後期の住居跡（234号住居跡）



総柱の掘立柱建物跡群



100号掘立柱建物跡



35号土坑



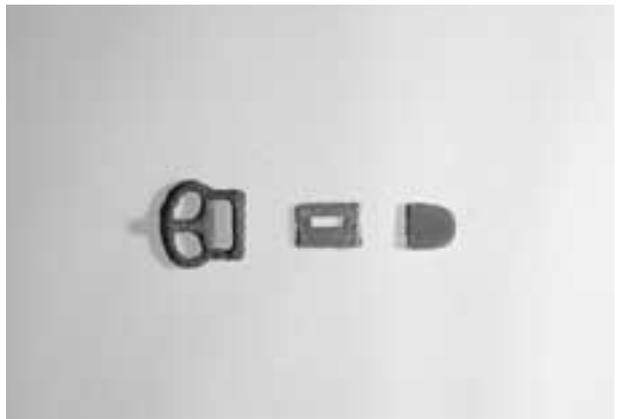
須恵器高盤



「八代」と墨書された土器



出土した主な鉄製品



帯金具（左から 鉸具、巡方、鈍尾）